ISSN 0286−1968

河上肇記念会報

No. 16
1984. 5. 10

〒542
大阪市南区島ノ内一−二〇−一九（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五二−三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五

法然院会場入口

目次

一九八三年総会特集　大門英太郎　(3)
京大白川会の事など　杉原四郎　(4)
河上肇の書簡（講演）　米浜泰英　(11)
日記の人名索引　竹井一雄　(12)
核廃絶の会　沖本彰　(12)
音読会四年目　野口務　(13)
河上先生とプロ野球、そして　増田孝　(13)
学生時代の想い出　カニェ邦彦　(14)
河上先生に習って　佐藤克己　(14)
河上先生を敬慕して　林辰彦　(14)
偶然の出逢い　鈴木洵子　(16)
お祖父ちゃんの想い出　藤田整　(16)
社会主義研究者として　安井功　(16)
河上全集と私　一海知義　(17)
河上日記編集のこと　(18)
図書紹介　(19)
会員通信　(23)
当番雑言

一九八三年総会特集

十月二十三日晴、前日の雨も上がり、秋晴。木の葉も色づきはじめた法然院の山門を潜り、会場に着く。やがて事務局長であり、本日総会の司会者である大久保雅摂氏、会場案内の鮮やかな一筆を持参、忙しそうに現われる。つづいて事務局顧問大門英太郎翁、受付など事務局を手伝って下さる美女を連れて来られる。早や入口受付には会員が三三五五。

定刻の十一時、貫主ご子息を導師に法要が営まれ、墓前に香が炷かれる。

会場にもどり、昼食を取りながらの総会が始まる。今年は予定した宇都宮徳馬先生が急遽中国訪問されることになり欠席とのこと、また法然院橋本貫主がご病気にて欠席とのことである。しかし五十名を超える会員が集まり、始終和やか。毎年のことながら東京から、九州から遠来の会員、老人ばかりと言われている割に、熟年層（ナイス・ミドルと言いたい）も多い。

全集の編集作業に、大学の学長職にとご多忙な世話人代表杉原四郎先生の興味深いご講演を賜わる。ひきつづき会員のスピーチは司会者の腕の良い庖丁捌きによって新味、熟味をえて、三時間余りが過ぎた。（記録係も兼ねた私は始終聞き惚れて、一時テープが中断してしまう失敗を犯してしまった）

総会に出席して、いつも心温まることの一つは墓前の梅の実による梅干を食することである。今年は故大橋隆憲先生のご夫人からそれが届けられ、食膳に配られた。もう一つは山下孝次郎氏からの贈物、般若湯と進々堂のパンとである。薬罐で温めた般若湯が茶碗で配られると、やがて会員の顔が赤らみ、話し声に活気が出てくる。おやつに渡されたパンをほとんどの会員がおみやげにして、夕日のさす山門を出て、坂道を下った。

（細川　記）

なお、本年総会期日が「時代祭」（総会前日）に接したために、乗り物、宿にご苦労をかけました。またそのために出席できなかった会員の方々に事務局より心からおわび申し上げます。

以下の総会記録（ご講演およびご発言）の文責は事務局本誌編集部にあることをおことわりいたします。

京大白川会の事など

大門　英太郎

本年秋の総会に宇都宮徳馬君を招く事を発議したのは私であり、アポイントメントもとり、会報にも予告したのであったが、同君が国交恢復十周年記念のために招かれて急遽、中国に出張する事になって約を果す事が出来なかったのは残念であった。宇都宮君は河上先生の門下生であり、私の同志として三・一五弾圧後の京大社研と学聯の再建のために戦った仲間である。戦後の所謂民主々義の有象無象の政治家連中の中にあって、志操高くしかも一貫した政策を貫ぬいて来た真に政治家らしい政治家として私は特に敬愛しているのである。先日、次の機会を作って必ず約を果すと言って来てくれている。

さて、この機会に大正末年、昭和初頭の河上先生指導下の京大社研の事どもを回想さして頂く事にしよう。

当時の京都帝大には河上肇をしたって全国の高等学校から俊秀が雲の如く集って来ていたのである。記憶の甦えた老骨が一寸思い出すだけでも、岩田義道、石田英一郎、淡徳三郎、山崎雄二、小林直衛、黒木重徳、小林輝次、栗原佑、鈴木安蔵、田代文久、安田徳太郎、太田典礼、太田邀一郎、泉　隆、芝春雄、葛野友太郎の諸氏が河上先生を囲んで意気盛んであった。私は幸、京大の地元、三高の社研にいたので、これら先輩諸氏の仲間に入れてもらって教えられたり、アジられたりして青春の情熱をもやしていたのであるが、三・一五の未曾有の弾圧のあと引きつづき、稲葉秀三、宇都宮徳馬、水田三喜男、勝間田清一、安井謙、亀山幸三、藤田信勝、山田新三郎、小泉仁一郎、和田耕作、伊達秋雄、佐伯千仞、船山信一、松田道雄、名和統一、日比憲一、田中文蔵、野口務、生沼曹喜、坂野善郎、服部周平、藻谷小一郎、等々の諸君が其の他の勝れた同志と共に全国から集って来て京大に立てこもり、初の治安維持法違反事件として京大を震撼した所謂「学聯事件」引きつづき「三・一五事件」河上先生の京大追放、社研の解散と非合法化、山宣の暗殺と労農葬、「四・一六事件」と昭和初頭の疾風怒涛の時代にあって互に腕を組み肩を並べて、最も苛烈な学生運動と社会主義運動を支えて戦っていたのである。

それから幾星霜、戦後ようやく落ち着いてから、三・一五以前の先輩達は「洛友会」を、其以後の者達が「京大白川会」を作って、いわば京大社研の同窓会をなしているのである。こゝに挙げた人々の中で生存者は勿論現在わが河上肇記念会の会員である。

すでに茫々六十年の昔の事である。私の最も尊敬し私にとって京大社研の表象的存在であった岩田義道さんは留置所の中で特高に惨殺されたのである。私がたまたま思い起しこゝに名を挙げさして頂いた人々だけでも、その戦中戦後の足跡を追跡して見る丈で、立派な河上肇記念会外伝としてユニークな昭和史が出来るのであるが、勿論老骨の力及ぶ所ではない。私もすでに七十九翁、紅顔の少年の頃を偲び、去って行った亡き人々の事を思うこと頻りである。

（本稿は、本年総会の開会挨拶に後日加筆されたものである　―編集部）

河上肇の書簡

杉原四郎

本会が毎年河上肇の誕生日の十月二十日前後に開いております法然院での総会に、本日はご遺族の方々やはるばる九州からも多数の会員がご出席下さいましてありがとうございます。

只今大門さんからお話がありましたように宇都宮徳馬先生のご講演を私たちは期待しておりましたが、よんどころない事情でお聞きすることができなくなりました。そこで今河上肇全集に携わっている私たちで何か会の皆さんにご報告を申し上げるようにとのことでございます。とくに昨年、一海（知義）さんがお話になりましたようにまとまった内容を私は準備している余裕がありませんでした。そこでのちほど皆さんからいろいろなスピーチをお伺いするまでの前座ということで、しばらくお時間を頂戴いたしたいと思います。

御陰さまで全集が昨年一月にスタートいたしましてから順調に今日まで刊行されてまいりました。月一回の刊行も今年の九月まで続き、現在まで二十一巻が刊行されました。あと数巻で第Ⅰ期が終るわけであります。ところがあと残っている数巻、私たちは編集者としても岩波書店といたしましても大へん困難な問題を抱えている巻が最後に残ったというわけです。それは八月に第二十四巻として書簡集の一番最初がでましたが、実は書簡集の最初の予定では、第二十四、二十五、二十六巻と最後の三巻に当てられていたのですが、現在集まっている書簡の数が約二千四百通あります。最初の第二十四巻に約六百通が収録されました。そうしますとあと千八百通が残っていることになり、仮りに六百通ずつ収録していくとしてもあと二巻でどうしても収まらない、少なくとも一巻は増さなければならないという状態になっております。しかも例えば獄中書簡は、河上が獄中でだした百数十通の書簡ですが、その一つ一つが大へん長いものです。簡単な算術計算をしてもあと三巻ほど、最初の予定より一巻増す必要がある、しかも一巻増して入るかどうかというほど書簡の分量が予定よりも遥かに多くなったのであります。つまり今私が数巻といいましたが、最初予告しました二十六巻ではとうてい収まりきらない、少なくとも一巻は増えるだろう、増やさなくてはいけない状態であります。

全集でありますから活字になって公表されたものは全部入れなければならない。ノートとか日記とかは最初から公表する予定がないが貴重な資料でありますから入れなければならない。ところでノートとか日記とかはご本人の手元に残っているものですから最初からどのくらいの分量かがわかりますが、書簡は―これは全集にとって非常に大事な資料で、どうしても入れなければならないものです―編集過程でどれだけ集まるか予測が出来ないものです。どんな全集の場合でもそうなんですが、全集に書簡集を入れるということで、編集する側も一生懸命に探します。またいろいろな連絡が―私のところにこんなのがありましたというように―あり、新資料がでてくるのです。実は第二十四巻、今回第一巻目の書簡集を出しましたときにも、すでにこの巻はこういう順序で収録するということになっていましたが、印刷する直前に新しい資料が入ってきて、岩波書店の編集部では順序を変えるとか、てんやわんやしたということがありました。恐らく今後もいろいろなところから書簡が提供されることがありましょう。私ども編集側は大へん喜しいことでありますが、それだけに書簡集の編集は不確実性といいますか、予測できない要素があります。

今後二巻ないし三巻の書簡集を出していく過程でいろいろなことがまた生じてくるのではないかと思っていますが、それにしましても二千四百通という書簡が出てきたことは河上という人物の偉大さ、幅の広さというものをあらためて私たちは痛感せざるをえないのであります。ただ河上から送られたであろうと思われる書簡がいろいろな事情で今は無くなってしまったということも私たちは発見し、大へん残念なことだと思っています。例えば河上のご家族あるいはご親戚への書簡についてみますと、ご承知のように河上は岩国の郷里で岩国小学校を終え、中学から高等学校まで山口に留学し、ひきつづき東大に留学、それからしばらく東京におり、その後京都に長く住み、また昭和五年に東京に移って、その間入獄、出獄があり、昭和十六年まで住んでいて、その年の十二月に再び京都に移り、京都で亡くなります。つまり中学・高等学校は近くですからしばしば岩国に帰ることがありましても、明治三十一年東大に入学して以来彼は故郷に住んだことはなかった。勿論、行事とかがありますと岩国に帰ってはいきます。そして彼は出獄した時、晩年は郷里に住み、暮らしたいという希望を持っていましたが、いろいろな事情で郷里に帰れなくて、亡くなってしまいました。その郷里にはお祖母さま、ご両親がおられ、お祖母さま、お父さまが亡くなられてからもお母さまがずっと生きておられました。弟の左京さんがある時期からずっとこの郷里に住んでおられ、この郷里の方々への通信といいますか、河上の書簡二千四百通の中に非常に大きなウェイトを占めています。ところが河上にとって家族、親戚の中で重要な、いろいろな影響を受けた伯父の河上謹一ですが、謹一宛の河上書簡が全然残っていない。それは沢山の手紙を出しておるのですが。そして、伯父さんからの河上への書簡があり、その何通かは残っており、これも貴重な資料でありますが、肇から謹一宛の手紙がない。結局それは出てこないであろう。というのは須磨に住んでおられた伯父さんのお宅が空襲で全焼してしまったからで、恐らくその時に焼失したのではないでしょうか。謹一さんの場合だけでなく、他の友人や門下生に対して河上が出した手紙もこの前の戦争のときに焼けてしまったのではないかと思われ、残念なことであります。ともかくも二千四百通以上の書簡が現在残されていまして、それが今回の全集に収録されることになりました。このことはご家族は勿論のこと友人、門下生、いろいろな方々が河上肇からもらった手紙を大切にして今まで保存しておられた、そしてその方々のご厚意ある提供によったことは大へん喜しいことであります。この書簡集の中にはご遺族の手を離れて、例えば櫛田民蔵宛の書簡のように法政大学大原社会問題研究所に入っております。こういう機関に入っているものがその機関のご厚意によって全集に収録することが出来ました。

河上の書簡を全体としてみますと、一つには郷里への両親や弟たち、あるいは郷里には河上家だけではなく秀夫人の里、大塚家のご親族も山口におられます。こういう方々を含めての郷里への通信が非常に大きなウェイトを占めているのが特色の一つであります。また非常に若い時分から亡くなるまでの時代を通じて、時には数多く、時には少いとはありますけれども、河上の生涯にわたっての書簡が残っていることもまた

一つの特色であり、大へん喜しいことであります。今一番早い時期の書簡、これも実は第二十四巻がまとまる直前に私たちが見ることができ、収録いたしたものですが、河上がまだ山口高等学校に在学していた時に出した手紙（全集二十四巻、二九一～二九二ページ）で、封筒がありませんし、何年何月というのが書いてありませんので、明治三十年か三十一年か、また何月かということもわかりません。ただ六日という日だけがわかるものです。これは冬の演習、昔の軍事教練に出て、自分が分隊長として演習に参加したということをお父さんに報告された手紙であります。これが今のところ一番古い手紙であります。

ご承知のように『自叙伝』には若い時の思い出、幼い時の思い出をいろいろと書いています。それから最初の東京時代のことも、例の無我苑に入ったときの事情などかなり詳しく出ておりますが、それ以外の例えば東大でどのような講義を聞いたとか、どのような学生生活を送ったとかという記録はほとんどありません。また京大に移ってからも、それから洋行したときの記録も、洋行から帰ってから『社会問題研究』を刊行します大正八年頃までの記録もほとんど『自叙伝』の中には記述されていません。『自叙伝』の記述が非常に濃やかになりますのが、マルクス主義研究に打ち込んでいく大正後期から京大を辞職していよいよ実践運動に入り、検挙・入獄する、そして出獄する昭和十二年までの記録であります。その前の河上、あるいはそれ以後の河上については『自叙伝』はふれていません。

その空白という点からみますと、まず東京時代の河上について、勿論その当時の日記というものは残っていませんので、もしもその当時の書簡が残っておったら非常に重要な資料になります。今度の書簡集でも初期の書簡として今申し上げました山口高等学校のものから明治四十年二月まで二十八通しか残っておりません。しかしこの二十八通の中には非常に貴重な手紙があり、これで私たちははじめてこういうことを知ったということがあります。すでに申しました山口高等学校の演習の記録がそうですが、東大にいき、あこがれの法科大学に入って、そして毎日赤門を通って法科大学の先生の講義を聞く、このときどういう状態であったか今度の手紙（全集二十四巻、二九三～二九五ページ）ではじめてわかりました。赤門は毎朝六時半に開けられる。けれども六時半に入ったのでは良い席が取れない、昔はマイクがありませんから先生方の講義を聞き、ノートをとらなければならない、ノートを十分にとるためには前面の席に坐らなきゃいけない、前面の席をとるためには学生は六時半の赤門の開く前にすでにそこで待っている、自分もそこで待っている、そして一番良い前面の席をとってノートをとっているということが書れています。その他いろいろ、学費が足りなくなったから送れとかが書かれお父さんに送っているのがあります。そういう東大生であった時の河上の姿を私たちはこの書簡ではじめて知ることができました。その他に例えば無我苑の伊藤証信宛に私は「どうしたらよいでございましょうか」という書簡です。これは「大死一番」という『自叙伝』の中に全文出てきますが、このオリジナルな書簡が今度はじめて岩波書店の編集部の方が伊藤証信の跡を継いでおられる愛知県の無我苑に行き、見てとられて今度の巻に載りました。それから彼はすでに大学院時代にいろいろな雑誌に関係するのですが、最初に関係した『明義』という雑誌について、彼がどうして関係したのか、この雑誌はどういう性格のものであったのか、今回はじめて出てきた手紙でわかりました。さらに彼は『日本経済新誌』という雑誌の主筆になるのですが、この雑誌がどういうところから資金が出て、どういう関係で彼が主筆になったのか、これも今回のお父さん宛の手紙ではじめて明らかになりました。このようにこれまで『自叙伝』にもほとんど出なかった彼の初期の活動が今回この二十八通の手

紙でかなりのことがわかってきたことは一つの大きな収穫であったと思います。ただ書簡というものは単に事実、つまり彼の伝記的なことについての資料、事実を明らかにする資料という意味だけではなく、河上という人物がどういうことを考えていたか、彼の気持とか思想とかという彼の性格が公に書いたものではなく、赤裸々にといいますか、建て前でなく本音といいますか、率直に書かれているところに価値があるのです。そういう点で初期のものを読んでいきますと、すでに河上の特色、人間的な特色がこの手紙の中に出ていて非常に貴重なものでありました。なかでも一つ私が強く感じましたものは、河上は暢輔さんと左京さんの二人の弟さんがおられます。このお二人に対して河上は兄であるという一種の責任感というものが非常に強いです。まず暢輔さんに対して自分が無我苑に入ったことによって学費が続かなく、暢輔さんが途中で学校を退学しなければならなかったことを河上は非常に気にして、その後いろいろな事について暢輔さんのことが手紙に出てきます。左京さんというのは歳も下でまだ幼いということもあってか、本当に兄として思っている気持を初期の手紙に率直に出しておられます。例えばあとで申しますがヨーロッパ留学中の河上の書簡があり、主としてお父さんに今日こういうところを見てきました、こういうことを感じましたと報告しておられるのですが、その中に左京さんは絵をお描きになる人ですので、ルーブルの美術館へ行って、こういう絵があったとその絵はがきを、こういう画集を買ったと左京さん宛に送っています。そういう河上の心遣いがその後のはがき、手紙にずっと出てきます。このことは河上の性格のあらわれとして私は強い印象を受けたわけです。

話がヨーロッパ留学の書簡に移りました。今回の第二十四巻には留学中の約一年半ばかりの間の書簡が全部収められています。とくに絵はがきを写真に撮り、図版としてこの巻に収録しています。この絵はがきをみてまいりますと、河上の性格がよくわかるものの一つに今申した左京さん宛の美術館での絵がたくさん送られています。その中で大正三年二月九日の婦人のヌードの絵はがき（全集二十四巻、三七二ページ）ですが、これをそのまま「葉書にして送りては内地の郵便局で没せられる虞あり、御両親様への封書に恐れ乍ら同封致置候」と書いています。このようにいろいろな配慮をして左京さんへ送る、そして今何を描いているか、どこへ出品するのか、しっかりやれよという兄としての心遣いを込めた通信があります。それからもう一つ私が面白いと思いますのは、彼は最初の予定ではベルリンに腰を落付け、当時多くの日本の経済学者と同じようにドイツで勉強するつもりだったのですが、第一次大戦が勃発してベルリンを追い出され、ロンドンに行き、結局ロンドンが一番長かったわけです。ロンドン滞在中、勿論ロンドンのカンターベリーとかウエストミンスターとかの名所の絵はがきを送っていますが、それは割合少ない。大体彼はあちこちの名所を見て回るということはせず、下宿で本を読んだり、原稿を書いたりしたということです。そこが河上らしい留学の過し方なのです。ロンドンの絵はがきは沢山あるのですが、その多くはロンドンの風景ではなく人物です。人物といってもどういう人物かといいますと、例えば新聞の売子、靴みがき、郵便配達夫、それからセメント道の上にチョークで絵を描いている街頭芸術家、などこれらをセットにしたロンドン・タイプスという名前の絵はがきです（全集二十四巻、四一一、四一三、四一六～四一七ページ参照）。河上は自から自分は人間が面白いのだ、風景とか名所旧跡とかでなくそこに住んでいる人間が自分には一番面白いのだと言っています。お父さんに送る絵はがきも名所旧跡のものもあることはありますが、それよりもむしろロンドンの人物、例えば新聞売り子（同、四一七ページ）、ここにはイースト・エンドで殺人が起り、警察が追求中と書いた紙片を持っているもので

す。そういうロンドンの市井の人、労働者であって、それにいろいろ注をつけています。このところに河上という人物の特色がよくでているのではないでしょうか。

それから最初の書簡集で一番重要な部分は櫛田民蔵宛の書簡であります。彼の場合学問上の友人あるいは門下生との間で学問的な意見を交換したという内容の書簡は、もし福田徳三宛のものが残っていたとすれば、多少はみられたかも知れませんが、残念ながら一通も残っていませんので、櫛田宛の書簡が貴重なものです。ご承知のように櫛田と河上との間にはいろいろ複雑な人間関係がありましたが、少なくとも櫛田の手元には河上が明治四十年に講師として京大に移ってくる、そのあとを追うように学生として櫛田も京大に入り、二人が師弟関係になる、その当初から河上の櫛田宛の書簡が残されていたのです。もっともご承知のように昭和三～四年頃から二人の関係がかなりデリケートなものになり、書簡の数も減り、昭和三年のものまでは残っています。要するに明治四十年から昭和初期までの相当長い期間の河上の櫛田宛の手紙が保存されていました。この手紙は櫛田が亡くなり、そして河上が出獄してから櫛田未亡人を通じて河上が預かり、その中の非常に多くの部分を河上は書き写し、それに対して自分の感想をも書き加え、それをセットにして自分の遺著の第三だといたしました。それほど河上にとって、櫛田宛の自分の手紙をまとめて晩年にもう一度読むことができたことは、非常に大きな収穫といいますか、少なくとも彼が自叙伝を書く場合に非常に大きな意味をもっていたと思われます。とくに大正十二、十三年頃には河上は日本の経済学会の大家、東の福田、西の河上といわれるほどの人物です。その彼が自分の弟子である櫛田から批判を受け、その批判には一本まいった、本当にそうだと感じて、もう一度勉強をやりなおそう。ここがまことに河上の偉いところであり、ちょっと他には出来ないところであります。この河上の若々しい、つまりだから君の批判を受入れる、しかし自分にはまだ解らないところがある、お互に切磋琢磨してやろうじゃないかという書簡が私たち経済学をやっている者からすると内容といい、筆づかいといいその当時のものは圧巻であります。しかもその中には、『資本論』の一句をどう読んだらよいかという学問的なものも含まれていて、今後にずっと残っていくものだと思われます。

ただ残念なことですが、以上に対して櫛田の河上宛の書簡が残っていません。もし残っておったとすれば例えばマルクス・エンゲルス往復書簡、あるいはリカード・マルサス往復書簡のように経済学史上の有名な学問的ライバル、友人との学問的な往復書簡になったのですが、この櫛田書簡はほとんど残っていません。ただ全く残っていないかといいますと櫛田の方には櫛田日記というのがあり、櫛田は京都へ勉学にきたときからかなり詳細な日記をつけています。この日記の中に河上先生に宛た手紙の下書きがでてきます。これはそれほど数が多くはありませんが、オリジナルが残っていなくとも、櫛田日記（新版櫛田民蔵全集の別巻に収録、今年末か来年の二月か三月頃に刊行予定、編者の厚意によって）をみますと少なくともその一部分を私たちは知ることができます。その一つの内容をここで紹介しておきたいと思います。それは大正二年八月六日、河上先生へという手紙の草稿です。この頃河上はヨーロッパ留学がすでに決まっていて、その準備をしていた。先生がいよいよ留学されるとしばらくは逢えないということを念頭に置いた櫛田の手紙です。櫛田の河上に対する心情といいますか、敬慕の念が非常によく出ているものです。これによって櫛田が何を契機に河上という人物を知ったかということ――これまでよく解らなかったこと――が解ります。まず明治三十年代末に刊行されていました『財界』という雑誌に河上が論文を書いているのですが、それを読んだことがそもそも櫛田が河上を知った最初

のようです。そしてその中に「……先生のご肉身を親しく拝する……」というように櫛田が京都に来て、河上宅でお風呂にでも一緒に入ったような記述があり、後学のものは先生の絶ず貴重な論文の提供によって刺戦を受けているといい、当時の留学制度についての河上の批判的な気持をよく知って、先生は先生流の留学をして下さい、それを自分たちは期待していると書いています。櫛田書簡の中には他にもいろいろ興味深いことがでてきますが、近刊の櫛田全集別巻を期待しておきます。

もう時間も過ぎましたので最後に次の書簡集（全集第二十五巻）に入るであろう獄中書簡にふれておきたいと思います。河上は昭和八年から昭和十二年まで獄窓におりました。それまで河上は書くということに生きがいを感じ、書くということによって自分の学問、自分のいろいろな意味での欲求を充しており、それが論文であり、随筆であり、講義ノートであり、あるいは書簡であり、日記であり、詩歌でありました。この書くということが獄中では非常に制限されるわけです。勿論転向のためマルクス主義は誤っていたと書けとか、宗教について書けとか、あるいは義務としてヒットラーのマイン・カンプを翻訳せよとかという書かされるものはありましたが、自分が内心から書くことが出来たものは家族への書簡だったのです。この書簡もそれ自体ままならぬものです。はじめは月に一回しか書けない、それも検閲などがあります。けれども次第に枚数も回数も多くなり、月に3回にはなる。書くことの自由といいますか、自分が書きたいことを書くという唯一の道はここでは書簡だけでありました。そして河上が自分の全身全力をかけて書いた獄中書簡百数十通のほとんどは肉親、親戚に宛たものであります。この点獄中書簡は河上の書簡中で非常に大きな意味をもっているものです。すでに『遠くでかすかに鐘が鳴る』上・下の二冊でその大部分が活字になっています。しかしこれは全部ではありません。今回は残されている全部が全集に収録される筈です。これだけが自分の書くという欲求を充たす、そして社会と自分とを繋ぐ唯一の手段として書簡にそそぎ込んだ情熱といいますか、一字一句を――本当の自分の本音を書くことができない特殊な状況下で――いろいろな表現を通じて書かれた書簡は人間河上のいろいろな面を知るばかりでなく、河上研究にとって非常に重要なものであります。

また河上の獄中書簡に対して外からのご家族、ご親戚からの返事があります。河上はその返事を待っています。そしてそれを読んでいろいろなことを知り、それに対して手紙を書く。それ故に一種の往復書簡という形式をとることが出来れば、私たちは一層いろいろ知ることが出来るのですが、残念ながら河上の書簡集ですから河上の外へのものに限られ、外からのものはありません。ただそれを補うものとして、先きに言いました櫛田日記と同じように獄中日記が第二十二巻としてすでに刊行されています。その中には河上は秀夫人、大塚有章さん、芳子さん、左京さん、そしてここにいらっしゃいます静子さんから貰った手紙に自分にとっていい手紙であったというものを日記に書き写しています。今回刊行される獄中書簡をお読みになるときにはこの日記、例えば秀夫人がどういう報告をした手紙を出していられるか、京都の静子さんからどんな手紙が来て、河上がいかに喜しい気持で受取ったかを合せてお読み下さることをお薦めしたいと思います。なおこの獄中書簡の中からとくに河上の気持がよくあらわされている一つ二つのものを最後に紹介して、私の話を終らせたいと思います。

その一つは、昭和十一年丁度河上が獄中にある間に芳子さんが鈴木重蔵さんと結婚されることになります。このことは、秀夫人が詳細に、勿論手紙に書かれ面会の時にも報告されたのでしょうが、河上書簡にもいろいろ書かれています。とくに河上が父親として注意を与えている書簡をみますと、芳子さんが嫁入りに持っていく道具、例えばタイプとかミ

シンがでてきますが、「私は序に博文館発行の『辞苑』と三省堂編纂の『家庭百科事典』とを（もし鈴木さんが持って居られなければ）持ってゆくことを勧めます。之は茶の間に備えつけて見るくせをつけるためです。そうした善いくせをつけておくと、一生のうちどれほどとくをするか分りません。芳の手紙にはよく画を間違った漢字があります。これからタイプでも稽古するようになると、いつまでもウソ字を書いて済ますようになるかも知れません。殊にａｂｃに慣れると、アイウエオの辞書をひくのが下手にもなり面倒にもなります。それで私は新家庭の茶の間にこうした日本の辞書を備付けることを提議するのです。これは書斎に置いては駄目です。つい面倒だからひかなくなります。」（『遠くでかすかに鐘が鳴る』下、七ページ）という注意を書いておられます。そしてさらに次の手紙に追加えて、「今日面会の折静子へ備付をすゝめた漢字の字引は『新漢和大字典』（宇野哲人編　三省堂刊）というのです。これは小島（祐馬）博士に指定して買ったのですが、使って見ると果してなかなか善い漢字典です。それから日本語の字引としては、私は『辞苑』（新村出編　博文館刊）というのを使用しています……この二つの辞典を、この際私から、静のところと芳のところへ贈りたいと思います。こうした辞典を気軽に利用する癖をつけることが一生のうちでは大変なとくになると思うので、思いついた機会に、老婆心ながら、之を私からの贈物にしたいのです。」（同書、十二ページ）と書いている。それからさらにもう一度、三信目（第九十信）に「静子と芳子とにもう一度注意しておきますが、『辞苑』は絶えず利用する癖を早速つけて下さい。辞書というものは、なじまなければ駄目だし、なじんで来れば、機に応じてふくろの中の物をさぐるように、所要の箇所がすぐ出るようになるものです。今の若い者はアイウエオよりもａｂｃの方が楽なようですが、アイウエオでも直きに慣れて来ますから、ぜひそれまで辛抱して下さい」（同書、二十三ページ）と三度も同じことを繰り返して手紙の中に書いています。これは、芳子さんが結婚される機会にお二人に注意をしていられる、非常に河上らしいといいますか、父親の愛として読むことができます。

もう一つは、秀夫人の手紙の中にはいろいろな植物が書かれています。留守宅の庭で栽培している花が咲いたことなどを河上に報告されていて、それが獄窓の河上の心を慰めるわけです。ここでとくに朝顔と夕顔についてみますと、昭和十一年八月二日の河上の秀夫人宛には、「朝顔はどうしたかと思っていましたが、五寸の大きさのものが咲いたと言ふこと、これは秀の仕事としては大した成功です。少し大き過ぎるので測り間違へて居るのではないかと思うたほどです。去年八月九日頃の便には三寸八分位の花が咲いたとありました。『朝顔は葉のみ繁りてゆさゆさと咲きも得ずに花のあはれさ』といふのがその時のあんたの歌でした。」と、つまり一年前に朝顔の花が咲いたことが秀夫人から報告され、歌がそえられていた。その時は三寸八分だったが、今年の朝顔は五寸だ、これはちょっと大き過ぎやしないかといい、そして秀夫人の歌を手紙の中に河上は書いています。もう一つの夕顔についてですが、これは昭和十年で、「十月二十七日付の妻からの手紙に、

『朝顔も夕顔も
花は次第に小さくなりましたが、
たとひ小さくとも花の咲くかぎり
抜いて棄てるのも可愛さうだと、
そのままにして見て居ましたら、
夕顔のみはなほしきりに蕾をつけながら、
たうとう開く力がなくなったと見え、
蕾のまゝにしぼんでゆくやうになりました。

それは余りにも痛々しく却て可憐さうだから、
私は昨日みんな抜いてやりました』
私はその夕顔にも似たる自分の今の運命を顧みて悵然として短歌二首をつくる。
咲く花の日にけにほそり今はただ霜ながらにしぼむ夕顔。
開きえで霜のまゝにしほれゆく秋深き日の夕顔あはれ。」（全集二十二巻、九十九～一〇〇ページ）
とその時（十一月五日）の日記を終っています。また秀夫人宛の手紙（第六十五信、十一月一〇日）の中にも、「過日の秀からの手紙にあった夕顔を、とてもあはれに感じました。それで」（前掲（上）一六九ページ）との二首の短歌が出来たと書き送っています。この獄中書簡には奥さんや郷里のお母さん、左京さんあるいは静子さん、芳子さんに宛てられた河上の万斛の思いを込められた書簡であります。この書簡に対して獄外からの手紙がきて、それを河上が読み、日記に書き写す、また返事を書く。この情況について今回の全集の獄中書簡、そして獄中日記、さらに第Ⅱ期に刊行予定されている。『自叙伝』の中の獄中生活の記述をお読みいただきたいと思います。この三つを重ね合せますと、私たちの河上に対する理解が一層深まっていくのではないでしょうか。以上で私の話を終らせていただきます。

〈会場スピーチ〉

日記の人名索引

米浜泰英

一昨年のこの会の総会に出席させていただき、その翌年の一月から河上肇全集は順調に出版してまいりました。ここへきて、ちょっと途切れました。本来は明日あたりに第二十三巻の晩年の日記――昭和十三年六月からお亡くなりになる昭和二十一年一月まで――をださなければならないのですが、一カ月おくれました。この日記はそもそも一冊に入れることが無理なようなものであります。頁数は七三〇頁近く、寿岳文章先生の解説と一海知義先生の校注が付き、さらに一番やっかいな人名索引を付けることです。実は索引を付けることに私たちは御免蒙りたかったのですが、杉原先生と一海先生とのご意見では本を利用される立場から是非と強い要請があり、索引を付けることにしました。索引の作業が一通り終りました段階で、やはりいろいろ便利なものだということがわかりました。獄中日記と晩年の日記とを合せた人名索引ですので、獄中で知り合った人たち、晩年に親しかった方々がでてきます。索引全体をみわたしますと、森鷗外、夏目漱石といった書物の世界で接した人々、大学の同僚だった人々、それから親戚の人々とが雑然と出現し、河上肇の晩年の人間関係がすべて登場しています。こうした点からは索引を付けた方が便利であると思われました。この日記が予定より一か月おくれ、来月にでます。

今杉原先生のお話があったように、書簡については、編集期間中にどんどん増えてきたこと、つまり新しい書簡が次から次へと提供される、私たちが目星い方に連絡をとるとなかには全集が刊行されていることす

らご存知ない人もあり、それで初めて提供されるということもあります。さきに言いました索引作りから、河上とどういう関係にあったか私たちにはわからない人々がありますが、こういう関係であったということがわかってもその人はもう亡くなっておられ、現在遺族の方がどこにおられるのか私たちにはわからない人たちがまだたくさん残っています。もしこの人たちと連絡がとれ、また新しい書簡が出てくる可能性があり、結果として全集の巻数が落付かないようです。そういう意味で書簡を全集の最後の巻数に並べていますので、新書簡が出てきて巻の増えるのはお許しいただけるかと思います。現状では少なくとも一冊の増刊はやむをえまいと思っております。書簡の内容については杉原先生のお話でいつくされています。きわめて殺風景でしたが編集作業現場からの報告です。

核廃絶の会

竹井一雄

私は京都の加茂大橋東に本屋をやっております臨川書店の竹井と申します。宇都宮とは高等学校で一緒で、彼は三・一五のあと京大の社会科学研究会を立直そうと思って京都に来た。私は東大に行きました。大学を卒業して数年後に私は彼の妹と結婚しましたから彼とは学友であり、同時に義兄弟というわけであります。先きに大門さんからお話がありましたように彼は軍縮・平和という問題に取り組んでいます。これは非常に大事なことであり、彼は本当のスティツマンとしてやっていると思うのです。

自分のことをひけらかすようで恐縮ですが、私は東大の先輩の松本君と関西地方の中小企業家の核廃絶の会をやっております。実は大門さんと話し合って宇都宮が今回来たら、関西地方の一部、二部上場の会社のお偉い方を集め、彼の話を聞こうじゃないか、それが終ったら私たち中小企業の会で座談会を開き、核廃絶の話を聞こうじゃないかと思っておったのであります。だが残念ながら今回はそれが出来なくなってしまいました。

音読会四年目

沖本彰

本来ならば、毎年本会に出席され、お話をされる音読会の代表塩田庄兵衛先生が今回ご病気でご出席出来ませんでしたので私が代りに音読会の現況を報告させていただきます。

河上肇生誕百年祭を切っ掛けとして『貧乏物語』を皆で声をだして読もうということではじめ、二年目、三年目とは『自叙伝』を読み、今年は『貧乏物語』にもどってやろうということになりました。昨日も最初の音読会が出版しました「『貧乏物語』の世界」の記念パーティを開き、音読会も皆さんのご支援で四年目に入り、継続しております。

「『貧乏物語』の世界」は河上全集という尨大なものでなく、現代と河上先生の精神ということで簡潔に書かれていますので是非読んでいただきたいと思います。

現在会は京都の教育文化会館で毎月第三木曜日に開いております。一度でも結構ですので皆さん是非ご参加下さい。とくに若い層の方にご参加していただき河上精神を次代に引き継いでいくという目的をもっておりますので皆さんの子供さんとかお孫さんに推めていただきたいと思います。

私は河上先生と同じ岩国の出身です。京都でなく一海先生がおられます神戸大学を卒業した者です。今後ともよろしくお願い申し上げます。

河上先生とプロ野球、そして

野口　務

東京河上会の万年幹事をやっております野口でございます。京都は昭和三年に入学して、もう五十年以上過ぎています。十月になるとなんとなく京都に行きたくなるのですが、この時期は忙しいのです。私の本業の日本シリーズがあります。

河上先生は非常にプロ野球がお好きでした。上井草で先生にお目にかかったことがあります。これは非常に不思議なことですが、昭和十四、十五年頃だったと思います、読売に牧野善三（？）がおりました。彼は大門君と同期なんですが、いつもプロ野球のキップを欲しいと言ってもっていきました。誰にいくのかと思うと、キップは石山（？）さんを通じて河上先生のところへいったのです。それから直接私がお受けしたこともありました。河上先生はどうも私の所属した巨人軍でなく、当時名古屋ドラゴンスの小川君のファンだったようです。このことは先生の日記と十分照し合せて研究してみたいと思っております。

これはちょっと宣伝になりますが、今年瀧川事件の五十年祭です。私はこれを記念して京大の学生運動史を編纂しております。来年中には出版しますので是非お求め願いたいと思います。『資料京都帝国大学学生社会運動史』といいまして、相当尨大なもの（八百ページ余り）になりましたが、田村氏の昭和堂から出版されます。

東京河上会の宣伝も加えますと、一昨日学士会館にて京大の平田清明先生の「河上肇における経済学と文学」というお話を聞きました。この日の会は朝日と読売の催し欄に案内が出ました。それ故か約五十名出席があり、二時間話され、大へん興味深かったです。珍しく堀江邑一先生が、そして住谷一彦先生も出席され、近年珍しく盛会だったと思います。

学生時代の想い出

増田　孝

私は大正十四年に京大に入り、河上先生の経済原論を受講しました。大学を出まして、郷里の北九州に帰り、現在幼稚園から短大まである折尾女子学園をやっております。

学生時代に河上先生の経済原論を受けました。これは全くマルクス学説でした。途中私は病気をいたし一年間休学、ふたたび復学しましたが、その間若い時でありますので、魂といいますか心のいろいろの方向に迷いが生じ、内村鑑三先生のバイブルに辿りつき、キリスト教信者になりました。ある意味から申しますと人生観の一八〇度転換したことになります。キリスト教による視野から経済学あるいは商業学を専攻し、その視野を修めて今日に至っているわけであります。

大学での同輩には大阪市立大学の名和統一さん、大阪大学の一谷藤一郎さんがおられましたが、もう亡くなっておられ、だんだん寂しくなっています。はじめてこの会に出席させていただき、先生を偲び、昔の学

生時代を思い出し大へん有難く思っています。

河上先生に習って

カニエ　邦彦

私は学校へ行ったことがないので、もう一つ学問のことはわかりません。しかし大正十二年だったと思いますが、秋の寒い時期でした、私は河上先生に毎日昼働いてきて夜に習った人間です。先生は毎晩やって来られ、私たち十名ほどに非常に丁寧に教えてもらいました。この仲間は十二、三名おったと思いますが、今生き残っているのは少なく、大半は亡くなりました。当時私は一番若く、十七才でした。ただ先生について印象に残っているのは非常に真面目で、私たち粗末な服を着た労働者ばかりを可愛がられるわけではないのですが、熱心に教えていただいたということです。今だに先生の熱心なというか、人間的な先生という印象が骨の髄まで浸みわたっていくような感じでした。

それから、こういうことが頭の中に刻まれていたのかどうか知りませんが、今日に至るまで私は労働組合運動一本でまいりました。

河上先生を敬慕して

佐藤克己

私は桜美林大学で経済原論を担当しています。河上先生の想い出は全集の月報（月報十六、「影ながら河上先生に会った想い出」）にも執筆しましたが、私の一番上の兄は――兄はアメリカで六〇年キリスト教の伝導をし、最近ハワイで引退し、今月の一五日に帰ってきました――同志社の出身で、河上ファンでした。学生時代夏休みなどに郷里に帰ってきたときや卒業して兵役に入るまで女学校の先生をしておりましたときに私は同じ部屋で住みました。当時河上先生の『社会問題研究』（合本したもの）を持っておりましたが、私は子供の頃でしたから内容はわからなかった。しかし兄から福田との論争など面白い話だけを受け、それから私も河上ファンになりました。私は東大の経済学部に入りましたが、心は遠く京都の河上先生の方へいっていました。当時河上先生の雑誌論文などが出ると必ず読むということで、東大経済学部を出たのですが河上先生の弟子だと思っています。今非常に残念に思っているのは、昔河上先生が大山さんと新労農党の演説会を開かれました。私はそれを聞きにいったのですが、会は開かれず、河上先生に一度もお目にかかることができなかったことです。

今では河上先生とは思想上も学問上も相反する立場に立っていますが、そういうものを越えて深く先生の人柄に共感をもち、心から敬慕しております。『自叙伝』も全部読みました。

先日の東京河上会には出席できませんでしたが、前の会に出席しました。その時は宇都宮先生、住谷一彦さん、大島清さんなど十数名の出席でした。そこで会が下火となっているのでどうすればという話がでて、私が口火を切って、河上先生の映画を製作してはどうかという話題を提供しました。

偶然の出逢い

林　辰彦

突然の指名で驚いていますが、今日は河上先生とは何のゆかりもない二一才の長男を連れて来ました。現在私は宇都宮徳馬先生のお世話になって中国問題、アラブ問題などを研究しています。読売新聞を停年退職し、八年になり、六四才を迎えました。松蔭女子学院大学の先生、アルジェリア協会の関西支部事務局長をしております。

河上先生の話をするとなれば尽きないのですが、私は大学を昭和一八

年に卒業した戦中派です。その頃助教授をしてイスラム教を研究していた沢崎堅造さん ――この人は石川先生の弟子であった――のところへ一回生のとき行き、夏休みに佐渡島の実家へ帰るので何か読む本はございませんかと尋ねたら、改造社からでている『経済学大綱』をわたされ、この本は途中で出してはいけないよと新聞で包まれ、家に帰ったら開けて読みなさいと。その本を持って家に帰り、その夏読んだのが私と河上先生との出合いでありました。一読して「今たとひ火にあぶられるとも、その学的所信を曲げがたく感じてゐる」というこの文章にふれて文句なしに――当時経済原論は高田保馬先生のものを聞いていたのですが――すっかり河上先生の人間、学説の魅力に憑かされました。それから京都に帰って来てから本屋の主人に河上先生のものはないかと言いますと店の二階や裏へ連れていかれるということによって、大体集めるだけ集め、読めるだけ読み、そして軍隊へ行きました。在学中に一度河上先生にお逢いしたいと思い、当時先生は吉田山の家ではなかったかと思いますが、佐渡の父が送ってくれた餅米やわかめなどを少々持ち、逢いたい一念でお尋ねしました。たまたま奥さんがおられなかったので逢えたんじゃないかと思います。当時私は満州旅行をして東亜研究会をやっており、研究会の機関紙を持っていました。若気の至りでした。先生に案内を請いますと、先生はすててと姿で出て来られ、障子を全部開けないで、三尺程開け、跪いて私と応対されました。あれだけ凄まじい、激しい文章をお書きになる先生を目の前にしたとき、痩せてやや震えておられるような感じでした。「君来たら駄目だよ、外には特高がいるかも知れないから、帰りたまえ」と言われました。私は持ってきたものを置き、さらに研究会の新聞も置いて外へ出ました。そうしますとポロポロと涙が出てきました。そして私は軍隊に入り、九州にいきました。やがて新聞に先生のお言葉と文章が載っておりました。年をとったから革命の邪魔にならないように世の中の隅にいるということでした。それで私は嘗てわかめや餅米をやったとかということを書かないで、先生の時代が来ましたから頑張って下さいと佐渡に帰ってからハガキをだしました。先生は覚えておられ、学生時代にあんなものをいただいて感謝していると返事をもらいました。それから日記（『晩年の生活記録』下巻）に「林辰彦君といふ京大経済学部の学生、小豆及昆布を届けくれらる。この前、聖護院に居たる頃にも、小豆、白米（もち米なりしか）など、玄関先まで持ち来りて直ぐに帰りたることあり、純粋なる厚意と思はる。感謝すべき也。」という一文が入っております。私はこれでもって銘すべきです。もう今まで河上先生の名前を何千回といい、河上先生の書物、新しいものも今の私の書斉にあります。仲なんかにそれとなくいうのですが、なかなか、今日長男がわかってくれて一緒に来てくれたのではないかと喜しいんですが。やはり河上先生と今の若い世代とでは変っております。革命とか社会主義とか共産主義とかあるいは素晴らしい人格に惚れ惚れするというものの考え方を失ってしまっている。若さを失っている。それを失わしているジャーナリズムにも私

は憤りを感じ、マスコミ批判をやっていますが。

以上のことで私は河上先生の弟子ではありませんが、一度お逢いできたということ、そして私の人生――余り幅たいことは言えませんが――何とか真面目に生きて来た、その生き様はやはり河上先生が私の心のどこかに強烈に生きている。学生時代に河上先生の著書を懐に入れた快楽と申しますか、生き甲斐と申しますか、そういった経験が出来たことは河上先生がなくてはならない、また偶然の出逢いでしたけれども私の人生に強い影響を与えていただいた数少ない一人の人だったと今だに誇りをもっています。河上先生を身近に感じ、残りの人生を働き、頑張りたいと思っています。

お祖父ちゃんの想い出

鈴木洵子

鈴木洵子でございます。どちらかというとお祖父ちゃんの印税で育てられたようなもので、お墓まいりだけは欠かさないよう心がけています。お祖父ちゃんの想い出といっても、私が終戦前に秀祖母ちゃんに大連に迎えに来てもらって引揚げてきたときから、亡くなるときまで一緒だったのですが、小学校一、二年ぐらいのときで、まだ小さかったのでよく憶えてはいません。でも進々堂なんかへはよく連れて行ってもらったこと、それから私は京都に帰ってから小学校に入ったのですが、引揚げて来て日本がはじめてでしたのでお祖父ちゃんは心配で小学校へ付いて来たことです。お祖父ちゃんが付いてくることは、私の担任の先生からすごく嫌がられ、そして私の祖母ちゃんに教育者としては甘やかし過ぎで、いけないと叱られていたことを幼心に憶えています。私は学問的なものはお祖父ちゃん孝行でなく余り読んだことがないのですが、ただ何というか子供みたいに思ったことをすぐ実行し、間違ったら、「あゝしまった」と言うところが割にナウイみたいです。まあ尊敬しています。

社会主義研究者として

藤田　整

私の父（藤田敬三）が河上先生に関係しておりましたので、私もこの会に出席しております。私も経済学を専門にし、とくに社会主義、ソ連の経済を研究しております。河上先生がソ連が成立した頃、つまり革命の頃についてどのようにお感じになっていたか私には興味があります。まだその点では何も読んでいませんので、これからいずれゆっくりと読もうかと思っているところです。晩年に河上先生は思想的に社会主義というものをやはり一番と思っておられたでしょうが、現実の動きはやはり複雑な過程をへて、現に存在する社会主義は必ずしもマルクスが考えた社会主義でなく、後進的な、またいろいろな要素を含んでいるということはご周知の通りであります。

日本では社会主義を対象とする研究者が百名ぐらいしかいませんが、日本の将来のためにどういう社会がという点から、つまり現在の社会主義国が実験をしているようなものですから、どこが良いのか、悪いのかを勉強していく、それが将来の日本にいくらかでもお役に立てるのではないか、そしてその点でいくらか河上先生の考えておられた理想に繋がるのではないかと思っています。

河上全集と私

安井　功

私は個人タクシーをやっています。難しいことはわからしまへんけど河上全集をとっています。運転手で買っているのは私一人ぐらいでしょう。難しいてよくわかりませんが、楽しみは全集の「月報」です。

この前に「月報」を書いた人を乗せました。東京の造形大学の先生で、上木敏郎さんです。上木さんの書かれた土田杏村の墓は、この会にこられた蠟川先生や先日亡くなられた大橋先生が眠っておられる智積院です。上木先生が言われるのですが、京都では人間が面白いと、私も案内していて、花や木の美しいのは見るとわかるが人間は説明しないとわからない。私なりにポンポンと人物を説明し、案内しています。

私がなぜ河上全集が好きやと言いますと、勿論河上先生が大好きということはありますが、この本をつくるのにここにおられる杉原先生や一海先生などが一生懸命にやってはることです。全集もこれから面白くなります。ともかく「月報」が楽しみです。良い月報をつくって下さい。

河上日記 編集のことなど

一海知義

私は中国文学を専攻しています。それも古い時代の浮世ばなれしたものを対象としています。陸放翁とは深い付き合いをしてきたわけですが、『貧乏物語』とか河上肇とかは何の関係もない分野で勉強してきました。ただ河上さんの漢詩が面白い、河上さんの中国の詩人の研究が面白いという点で関係をもつようになりました。

河上さんが漢詩に深い興味をもちはじめたのは獄中なんです。獄中で一番最初に読むのが陶淵明の全集です。日記にその詩に対する意見を書いているのですが、この意見が少し日本人離れしていて、日本人の常識的な解釈とは違う。それは例えば中国で言えば魯迅の解釈に大へん似ている。河上さんは魯迅のことを知るはずがない。そういう面を追って見ていく。河上さんの漢詩、和歌などはすでに出ている筑摩の著作集に載っているだけでなく、いろいろなとこにあります。そこで最初は出版されたものを読み、さらに元の原稿や日記などを追っていく。そのうちに河上全集の編集に引き込まれてしまったわけです。

全集第十九巻までは学者としての河上さんですから、先ほどから言われているように難しい。あとの第二十巻以降が面白い。すでに日記と書簡の第一巻目が出、続いて私の担当する漢詩、それに少年時代の文章を入れて刊行されます。確かに今後は面白いものが出ますが、米浜さんのお話のように編集の方は大へんです。今度の日記も七百ページあります。それを私は校正しているのですが、初校のとき二回読み、再校に二回と合計四回、約二千八百ページを読むことになり、大へんな仕事なんです。けれどもなかなか面白い、いろいろな発見があります。私は極つまらないことに興味があって、例えば河上さんは痩せて背が高いのですが、身長がいくらあるか体重がどのくらいあったか。プロ野球は当時名古屋軍、大学野球は東大の蟲展であり、奥さんが法政でよく喧嘩した。こういうことに大へん興味がある。またお酒を飲まないということですが、全然飲まないかと日記や手紙を丹念に読んでみますと飲まれるのです。どのくらい、最高の量がどれだけであるか調査することに興味があるのです。酒のことは文学に関係があります。陶淵明は非常に酒を飲んだのです。これは明らかに証拠があるのです。もう一人の――河上さんが一番好きだった――中国の詩人陸放翁は、丹念に読みますと酒に弱くて恥かしい

ということを書いている、ところが大酒をくらって壁に大きな字を書いたという詩がある。あとの方だけを読んでいると陸放翁は酒飲みだと誤解してしまう。河上さんは非常に正直な人ですから――陸放翁もある程度正直な人ですが、河上さんは輪をかけたように正直な人ですから――詩の中に一切酒がでてこない。それは河上さんの一つの態度でありますが。以上のようなことに興味があります。勿論漢詩に興味があってのうえですが。

ところで一つ失敗がありました。河上さんが漢詩を作りはじめられた昭和十三年頃、日記に――この日記の原稿を私が読んでない段階、つまり活字になった『晩年の生活記録』しか読んでいなかったのですが――一篇の漢詩が載っていたのです。前後に何の説明もないので河上さんのものだと思い、岩波新書の『河上肇詩注』にそれを入れてしまいました。あとで日記の原本をみることができ、それは神社のおみくじに書いてあった詩であることがわかりました。河上さんの詩ではないのです。非常に恥かしく、どうしょうかと思っているのです。これは全集ではきっちり改めました。さらに新書の再版がでるときにはきっちんと改め、読者にお詫びしたいと思っています。しかし失敗は一つだけで、他には新しく、いろいろな発見をしました。これもまたいろいろ加えたいと思います。

全集は只今のテンポでいきますと来年の夏には第I期全部が終り、来年の十月のこの会にはすがすがしい気持で、校正刷もみずに参加出来ると思いますので、皆さんもお元気で是非来年もご参加下さい。

〔質問があり、おみくじの詩は「餛飩未変時……」です。新書十三ページ、全集二十一巻六十五ページ参照　編集者〕

図書紹介

河上肇全集　岩波書店（刊行順　前号つづき）

第二四巻　解題　杉原四郎・一海知義　一九八三年八月

書簡一　河上肇より櫛田民蔵に送りたる書簡集、櫛田民蔵宛、明治三〇年より大正一三年まで

全集月報20

河上肇と登張竹風（登張正實）、『東京案内』と河上肇（杉原四郎）、稀にしかないもの（小田切進）

第一巻　解題　大野英二　九月

経済学上之根本観念ほか

全集月報21

初期河上肇とイリー（宮本盛太郎）、研究題目『経済史、特に近世経済政策史』（細川元雄）、河上肇に関する憶い出三つ（大久保利謙）、社会科学批判の手がかりとして（鶴見俊輔）

第二三巻　解題　寿岳文章・一海知義　一一月

晩年の日記

全集月報22

河上先生と私（美濃部亮吉）、秘密活動（コンスピラシト）はやはり悖徳である（内村剛介）、北一輝と河上肇（宮本盛太郎）

第一六巻　解題　大野英二　一九八四年一月

マルクス主義のために、ほか

全集月報23

昭和初期の「人口論争」と河上肇（大淵寛）、新「自黒里人」私

語（山下肇）、河上肇先生と山宣（佐々木敏二）、新労農党時代の河上先生（高島喜久男）〈資料紹介〉三木清「岐路に立てる河上肇博士」

会員通信

一

。秋の法然院、河上記念会、一度出席したいと思いながら、休日はふだんの勤めの日の埋め合わせになりがち。子供がもう少し大きくなったら、是非と思っております。（大阪　枚方市　稲垣千代子）

。一二月に修学旅行の引率で京都の方へ出かけます。その折、法然院へ寄れればと思っておりますが……。（群馬　前橋市　池田栄一）

。秋の法然院、とりわけご墓所のあたりを偲びつゝ、総会の盛会を祈ります。（東京　中野区　櫛田ふき）

。法然院の河上先生の墓前に立って、静かなひと時を持ちたいと思いつつ、今度は残念ですが、かないません。ちょうど総会の当日、私は中国旅行中なのです。今度は河上の弟子の王学文氏にお会いしてきたいと、面会を申込んでおりますが、王氏は病中とかで、思いが達せられるかどうか、いまのところ不明です。ご盛会をいのります。（東京　武蔵野市　大島清）

。その内、折をみてお墓にお詣りしたく存じております。ご盛会でありますよう願っております。（大阪　池田市　相澤実子）

。上落の機をみては墓参は致すものの、総会にはまだ出させていただいたことはありません。一度はと思いつゝ、今回もまた、よんどころない行事が先決しており、残念至極です。どうか実り多い総会でありますよう祈念しております。（岡山　岡山市　岸本竹志）

。人間社会の真の発展をのぞむためにも、マルクスの考え方はおおきい尊厳のものとして、まだまだ深く学ばねばならぬでありましょう。河上さんはそのため全生涯をささげ尽されました。大切な大切なそして貴重な存在であった、河上氏をいつまでもいつまでも追慕出来ることは実にすばらしいことでございましょう。さらに、これから真の人間の途を深めそして高める上からも。（千葉　柏市　山上嘉吉）

二

編集部の私供が知らない、会員の方々の相互の付き合いがあろうかと存じます。病気などで、体が不自由な方への通信をお願い致します。

。一身上の都合により、当分身動きができませんので、まことに残念ですが、よろしく。（京都　城陽市　永良巳十次）

。病臥中。（大阪　堺市　藤田敬三）

。病気のため欠席。（東京　三鷹市　富所長夫）

。近頃、病気がちで、残念乍ら欠席です。会報が楽しみですので、総会の模様やいろんなニュース等満載をお願いします。（三重　上野市　澤田嘉夫）

。難聴と緑内症で不自由しています。皆さんによろしく。（京都　右京区　木村京太郎）

。このところ、足をいためておりますので、失礼致します。（大阪　池田市　清滝幸次郎）

。参列させていただきたいのは山々ですが、年令的事情（七八才）などにより困難で、ご辞退させていただきます。（東京　世田谷区　辻恭平）

。病気（慢性肝炎）のためやむを得ず欠席します。（神奈川　海老名市　大即英夫）

。休調不良のため、欠席。（兵庫　西宮市　石井公代）

。足が悪いので今回は欠席しますが、次回は出席したいと思っております。（大阪　豊中市　井関安治）

。私の一生の方向は「第二貧乏物語」の研究によって決りました。いま古稀を迎えて、よくもいのちながらえたものと、感慨無量。この上は日本の完全独立と社会主義の入口を見るため、最後の微力をふりしぼりたい。（熊本　熊本市　福田政雄）

。昭和五六年の秋、法然院を訪ねたのが私の記憶。朝の静かさの中にいろいろ思いながらも法然院を訪ねた思い出といつまでも心に温めたものです。河上夫妻の墓と法然院、いつまでも記憶からはなれません。秋のためか私の心、洗われた気持を忘れません。（鳥取県　日野郡三好泰三）

。もうすっかり寝たきり老人です。活動せず生きてることが苦痛です。（京都　伏見区　渡辺みと）

。体調をこわし出席したいという一念を未だ果さずにいるのを残念に思っています。（東京　板橋区　武田正二）

。ぜひ参上したいのですが、健康上の理由から失礼せざるを得ません。（京都　左京区　岡部利良）

。六月下旬より食慾不進。自律神経失調症で身体がゆれて危険ですので外出は不可能です。七七才。（大阪　堺市　石田逸夫）

。日頃からその意を得ず残念に思っています。療養中のため失礼します。（大阪　貝塚市　尾崎義一）

。京大時代、先生の教えをいただき、経済学批判会で、討論に参加したことを、なつかしく思いうかべます。（東京　中野区　滝口義敏）

。老生、一八九七年六月一三日生れ。本年同日にて満八六才。荷を下し峠の茶屋で告天子きく、先生のご高徳をしのんで遥拝します。（徳島　徳島市　三村文一）

。病気のため遠方への外出が出来ませんので欠席します。（京都　長岡京市　榊明秀）

。足不自由のため欠席。（京都　東山区　大和春雄）

。八月に胃潰瘍の手術をし、ひきつづき入院中であります。順調に回復しておりますが、まだ出席は無理かと存じます。（目下、東京、千駄谷、代々木病院　塩田庄兵衛）

。病気療養中のため、今回も欠席します。ご寛恕下さい。（京都　伏見区　静田均）

。入院のため欠席。（東京　杉並区　高木右門）

。七月、体調不良で一ケ月入院。次第に回復してますが、遠隔地旅行は未だ無理なので、今回もまた、残念乍ら欠席します。（千葉　船橋市　田中萬）

。昨今、体調を崩しておりますので、欠礼いたします。（大阪　南区　田万明子）

。一度、出席したいと思いつゝ果せないうちに、本年三月三〇日脳血栓にかかり、左半身まひし、さいわい軽症でびっこを引く程度ですが、頭重く、左手のしびれひどいので、出席出来そうにありません。（奈良　五条市　福本正夫）

。今年は残念ですが、出席を断念しました。京都第一日赤病院に入院中なので、退院となっても、出席不能と思います。なつかしいお顔が見られないので、重々残念です。来年は出席出来るようガンバリます。目下コバルト照射をしております。（京都　宇治市　櫨正博）

三

。全集が順調に刊行されていることを喜こんでいます。残念ながら今年も参加出来ません。（北海道　小樽市　西垣邦夫）

。「全集」も完結目前。記念すべき総会でしょうが、当日はあいにくと

学会の予定とかさなり、欠席いたします。（高知　高知市　中谷武雄）

。岩波の河上肇全集、予約講読中です。自からの学問的良心に徹底して忠実であった先生、また高いヒューマニストとしての人間性にふれ、感激しております。（長野　木曽郡開田村　山下千一）

。返送しなければと思いながら忘れておりました。全集が大分積ン読になっております。（大阪　吹田市　八木隆）

四

。会報一五号、有難く入手しました。（兵庫　尼崎市　吉瀬重治）

。会報一五号受取りました。一〇月二三日は東京でのゼミ卒業生の結婚式への出席をうっかり約束してしまったので、非常に残念ですが出席出来ません。大橋満子さん宛会報をお送り下さるようお願い申上げます。（東京　豊島区　内海庫一郎）

。楽しみに致しておりました会報一五号拝読しました。会友の皆様方とひとときの歓談をと思いますが、なかなか多忙で出かけられず残念です。はるか山口の地より、成功を心より祈っております。（山口　防府市　上田隆）

。会報一五号拝受。小生の五八年度の会費はいかがですか？おしらべ下さい。当日、同刻に慰霊祭の世話人に当っていますので残念です。（京都　上京区　田中真三郎）

――事務局より　五八年度の会費いただいております。――

。会報一五号、意義深く読ませていただきました。（愛知　津島市　高島進）

。会報一五号、めずらしくゆっくり完読させてもらいました。大島先生と前川先生の文、たいへんいいものでした。会を維持して行く方々の努力、並たいていのものではないでしょうが、民主主義が窒息していくこの世の中を憂える者として、先生の精神を世に広めていくために頑張って下さい。（茨城　水戸市　河原井忠男）

。貴会報のおかげで、西川勉氏「戦死やあわれ」のご縁が出来、去る七月、追悼会に出席できました。九月末刊『河上』全集第一巻で、河上先生の学生時代の筆名『山下了』を確認し、次回の全集月報（岩波）には、こうした私との姓名にかかわるふしぎなご縁について寄稿を依頼されました。私なりの一話題です。まことに残念ながら、同日、同時刻（午前一一時より）に関西大、大学院での教え子同士の結婚式（京都グランド・ホテル）が予定されており、早くから出席を約束させられていますので失礼いたします。なお、「世話人」を引受けよとのご依頼、名前だけでよろしければ、喜んで承諾いたします。（大阪　吹田市　山下肇）

。去る九月に法律文化社刊、塩田庄兵衛編「河上肇と貧乏物語の世界」を購入し、病院生活のつれづれに再読しました。坐右の書が増えた、静かな感動です。九月一四日、市内にて車にはねられて三ケ月の重傷入院。二七日目の入院生活です。年内に退院出来ましたら、上洛し、法然院へ墓参にまいります。総会出席できないこと残念に思います。（愛媛　川之江市　千田晴之）

。七月の定期移動でNHK金沢放送局から高山放送局へ転勤しました。高山は小生の〝ふるさと〟で張り切っています。（岐阜　高山市　池之端甚衛）

五

。貧乏学生ゆえ、東京からそちらに赴くわけにも行かず残念です。しかし、今年マルクス没後一〇〇年を機に、漸くマルクス「資本論」を友人達と精読を始めました。杉原四郎先生のご著書なども参考にさせていただいております。河上肇先生の翻訳、解釈も学んでゆきたく思います。（東京　町田市）

。小生、七四才、遠路につき欠席いたします。（東京　練馬区　金子楽）
。遠いのでなかなか出られません。それに二二、二三日と仙台（東北大）に学会があり出ます。悪しからず、お許しのほどを。（北海道　小樽市　佐藤俊明）
。たいへん残念ですが、遠すぎて参加できません。はるかにご盛会を祈り上げます。（岩手　盛岡市　横田綾二）
。遠路で催しものなどの出席は困難ですので、よろしくお願いします。（茨城　那珂郡緒川村　山口春男）
。遠隔のため出かけられません。あしからず。（東京　杉並区　渡辺真澄）
。今春、京都に小さなアパートを購入、関西へ転勤となれば、出席可能になると思っております。（青森　青森市　京藤英一郎）

六

。河上先生の法然院の集会、ご案内ありがとう。さっそく参加の返事を出しましたが、当日は時代祭とぶつかる由。どうしても宿がとれません。従って出席取止めのほかなくなりました。今後は、この種の観光行事とぶつからないような日取をお選び下さるよう願い上げます。取急ぎおわびかたがた折角、ご健斗を祈り上げます。なんとも残念でなりませんが。（横浜　戸塚区　田中文蔵）
。涼しくなってまいりました。お忙しい中、いつも河上会運営にお力を割いていただきまして恐縮に存じております。さて、一〇月二三日の総会に出席の通知をさせていただきましたが、当日どうしてもさけられない用事がございますので、お手数ながら、お取消し下さるようお願いいたします。非常に残念ですが……。（兵庫　西宮市　井上喜代松）
。本年度の総会には何う予定でしたが、差しつかえ出て来、出席できないことになりました。よろしく。（兵庫　西宮市　色川幸太郎）
。本年度総会に「出席」とご返事しながら欠席してご迷惑をかけたことと思います。実は名古屋まで出張の帰途、立寄るつもりでいましたところ、二二日、ホテルで風邪のため高熱を発し、急きょ、帰宅した次第で、心ならずも欠席しました。悪しからず、ご諒承下さい。（山口下関市　山口龍雄）

七

。奈良赤旗まつりに参加のため欠席します。（奈良　大和高田市　土庫（どんど）病院）
。大変に申訳けありませんが、当日は私どもの上部組織の総会日に当り私は責任者であり欠席となります。年内に上京の節は先生の墓に参りたいと存じますので、ご参集の各位、諸先輩によろしく。（横浜　中区　佐藤敬治）
。小生、六〇年来の知友が先般永眠いたし、この二二日に執り行われる追悼式典に参加しますので、残念ながら欠席します。（大阪　堺市　尾形繁之）
。当日、石垣島での学会に参加する予定になっていますので欠席します。（和歌山　西牟婁郡白浜町　布施慎一郎）
。一〇月二三日は大阪で労働運動史研究会がありますので、関西へ行くのですが、同じ時間なので出席できません。約束ずみなので残念です。今年は是非、河上さんのおまいりと思っておりましたが。（東京　渋谷区　亀山幸三）
。大正九年の八幡製鉄大争議の指導者西田健太郎没後五十周年、偲ぶ会の事務長として多忙のため欠席させていただきます。（北九州　八幡区　山上繁喜）

〔以下会員通信（八）次号へ〕

当番雑言

。何年ぶりかの厳しい冬となって、会員の方々のご健康が気遣われる。危険な風潮が拡がる中で、酷烈の時代を生き抜いている会員の方々は時代に対して重要な役割を担っておられるわけですから、ご健勝を、殊更に祈ります。老いてますますさかんが望まれます。ある日「私の健康法は森林浴と平和運動です。」という言葉に出会いました。会員の方にも「私の健康法は〇〇と河上肇運動です。」と言って拡めていただきたいものです。

。会の長老会格で総会の締めをおねがいして来た稲田秀爾氏が逝き、今息で会員の素臣氏より、一〇万円の寄付をいただく。一九八四年は会の財政再建の年でして、事務局の一員として感激しました。今後は会員の方々にご心配をかけることを少くせねばと自戒しております。

。同級の近藤氏が引越しのひょうしに見つかったと、河上祭の第七回パンフレットを渡してくれた。一九五三年とある。河上祭は京大、同宇治分校、同志社、立命館、鴨沂と各校にまたがり、十日間にわたっている。映画、ダンス・パーティ、音楽会を含んで、講演者は末川博、福井孝治、名和統一という方々だけでなく、神戸正雄、谷口吉彦、服部之総と立場や傾向の異る名もあって巾広い。（上はすべて故人）当会の住谷悦治前代表世話人の名は無論見える。岩波書店、有斐閣、光文社という出版社や進々堂の広告もある。風潮は変った。三十年前、作った本人は大衆化への一歩のつもりだったが、はねあがりだったと自己批評。一九二八年、京都大学新聞に載った「大学を去るに臨みて」が抄録され、河上の文は軽薄な批判を峻拒しつゝ、一九八四年を越えて未来を指している。粛然とする。

（大久保　記）

編集後記

桜の花も散り、早や新緑の季節をむかえる頃となりました。会報本号は半歳も発刊をおくらせてしまいましたこと、ただ編集子の非力であります。ここに会員の皆さんに深くおわび申し上げます。

昨年の暮編集子は公務にて東京に出張、その折古書店にて『河上肇講述、経済原論　大正十二年度講義』を入手しました。本書をとくに求めたのは、マルクスとレーニンとの肖像画が二枚挿入されていたからです。旧蔵者のこの本に対する態度を勝手に読み込み、喜んで自分の蔵書に加えました。

本年三月、同じく東北大学に出張、河上の門下生であり、よき学友となった櫛田民蔵の旧蔵書のある文庫を訪問しました。櫛田文庫は東北大学附属図書館の多くの特殊文庫の中に架蔵されていました。約二千冊の洋書を中心に、丹念に拝見させていただきました。河上文庫の整理を経験した編集子の第一印象は、河上の旧蔵書の多くが書き入れと線引きなど、まことに饒舌であるのに対して、櫛田のものは寡黙でした。

この文庫の洋書の中に一冊河上の旧蔵本がありました。「大正六年春三月末京都にて　河上肇印」と標題紙に、河上の筆蹟と独特の捺印。これはローンツリーの『貧困――都市生活の研究』でした。本書の同じもの（版次、装幀とも）は河上の旧蔵書に「大正七年一月三〇日櫛田君より新本返還」と書き入れたものがあります。櫛田が河上先生から借り、先生に同じ書物の新本を返却したにすぎないことですが、櫛田の几帳面さ、そして潔癖性を感じるとともに、同書の第四版が櫛田文庫に架蔵されているのを発見するに及び、対書物の二人の交流と断絶とを私なりの勝手な想像がふくらみました。

（細川　記）

次号非力な編集子は休暇をいただき、当番氏にお願い致しました。

河上肇記念会

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十一年になります。毎年秋には河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は、事務局へご一報下さい。

〒五四二　大阪市南区島之内一丁二〇ノ九(丸善石油ビル)千代田商事株式会社内　河上肇記念会

貧乏物語　初版

河上肇記念会　会則

一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。

二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。

三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。

四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。

五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。

世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。

六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。会費は年額三〇〇〇円とする。

七、この会則の改廃は総会の議決による。

京都（きょう）に〝煙〟あり

1965年　創刊　只今46号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（70～80才）が出している異色の同人誌、埋れた青春像の発掘を柱に詩・歌・小説・エッセイもあり、各地、各界、各層からの便りを〝声〟欄に収めているのも特色

A5判120頁　頒価500円　〒200円

「煙」　同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

児玉　誠方

電話　京都（075）811－7646番

振替　京都　2－15653番